

明治用水讀本

— のびゆく農村 —

明治用水讀本

愛知県教育文化研究所編

愛知県教育文化研究所編



源を獲得して、組合員内の農業電氣需要にやすく供給しようと計画をたてている。

三、明治用水はどのような恩恵を與えているか

1. どのように開拓はすすんでいったか

(一) 開こんと土地改良

いまこの地方を歩いてみると、ゆるやかな起伏をもつた洪積層台地は、見渡すかぎり稲穂の波うつ水田で、そのところどころに、松の木の立並んだ小さな草地在して、田に働く人々の休み場になっているのに気がつくだろう。今は昔、用水開発以前の小松林、すゝき野原を物語るわずかな名残である。このように用水の力は、地表の景観をすっかり改めてしまったのである。

しかし、この変化は一日にしてできたものではない。そこには働く人達の、文字通り汗と血のにじむ開拓の努力が続けられていったのである。

開拓の歩みは、用水が開通した年からはじまった。開こんにもつとも苦心をしたのは、いままでの山林原野であつた。このような土地は、封建時代には村人の共有で、草刈や薪とりの場になつていた。生産の低い土地で、維新後多くは官有地となつたものである。民有地になつたものも、山林の売買価

格が平均一反歩五十錢だつたといわれる。人々は年期をきめて、開こん試作を役所に願いでて、努力して水田として、払下をうけて自分の所有にしていつた。また以前は、天水灌溉のため無数の溜池があり、中には面積數十町歩に及ぶものもあつたが、そのほとんどは不用となり、ことごとく開拓されて水田となつた。そのうち、敷地反別四八八町歩は、用水工費を出した五人の人々にその功績に報いて無償で交附された。またいままであつたやせた畑は、水を入れてたゞちに水田に転換した、溜池の水を引き井戸水を汲みあげて灌溉していたいままでの田は、用水によつてかんばつの心配がなくなつた。用水開通四年後の明治十六年（一八八三年）来の灌溉面積表によつて、当初の開拓状況がほゞ想像できる。

その後現在に至るまでの灌溉総面積の増加の様子はグラフによつてほゞ知ることができる。その初期においては、明治十五年（一八八二年）までに古田配水がほゞ終り、二十年（一八八七年）ごろまでは、山林原野の容易なものが多く開墾され、以後それが困難となつて畑地の水田転換が多くなつた。十七年（一八八四年）には矢作川に架橋して水を渡し、対岸幡豆郡に灌溉したため前年より五五〇町歩余もふえた。また日清戦争後の開墾にたいする需要もふえたので、三十三年（一九〇〇年）に用水取入口に堤堰が築造されて水量が増加したため、開拓も進んだ。この間幹線水路から支流小水路が開

明治16年(1883年)配水反別

古田で灌水の利を受けたもの	19.331.8	反
従来の畑が水田に転換したもの	8.137.4	
山林原野を開こんしたもの	11.298.6	
従来池・井戸で灌漑していたもの	967	
溜池の床地を開拓していつたもの	4.585.7	
合計	4.3450.4	

かれ、全配水地域にわたつて網の目のように水路が普及していつた。このようにして、明治四十年(一九〇七年)ごろまで毎年百町歩内外の増加を見ているが、それ以後は増加が少くなつてゐる。大正十五年の急激な増加は旧枝下用水と合併したためである。その最高は今次大戦直前で面積約一〇、四〇〇町歩に達し、区域は三郡十六町村一一七大字にわたり、開発当時の三倍近くにまで発展した。

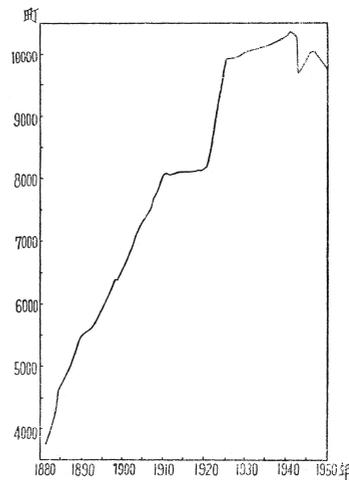
昭和十七・八・九年に減少したのは、戦争によつて広大な田畑が軍用地になり、また勞力不足で耕作者が減少したためである。この傾向は二十年を最低として戦後軍用地が再開墾され、しだいに増加して戦前の状態にもどりつゝある。しかし二十三年を境としてまた減少しているがこれはいまままで用水路・道路・畑宅地変換によつて、実際の耕地面積よりは減少してゐたが、そのまゝ配水台帳が訂正されずに放置されてゐたところが、二十三年度から地主に代つて直接耕作者が配水料を納めるようになったため、正確な配水面積を出して訂正したのである。こ

これは一面日本農業の新しい転換の方向を示すものであると
見ることができよう。

灌漑面積の増減は、その時代の社会状態と密接な関係があり、また農業経営の形式と発展の方向が意味されているわけである。

このように用水の開発によつて耕地は増加して行つたが、
しかしたゞ開こんして水を通しただけでは米はできない。

ことに配水地の地質はほとんど洪積層で、重粘な有機質に
乏しいやせ地であつた。このため開こんの初めごろは、田の草取を
すると指先から血が流れ、秋の收穫に入つても稲刈をする価値も
ないような苦しみと歎きが続いた。土地をたゞで貰つても、開
こんすると、家産を潰すといわれた所もあつた。開こんに続く
仕事は地味の改良である。そのため農閑期に岡崎などの市街地
から塵芥を車で運んで堆肥とし、あるいは矢作川沖積地の土を
運んで客土とし、牛豚を飼つて厩肥を作り、その外各種の肥料に
人知れぬ研究と努力が続けられた。それは骨の折れる長い仕事
であつて、人が一代二代とつづいて行われ、そして現在なおつづ
けられ、改良と工夫が考え



(明治十三年—昭和二十五年)
灌漑面積の増加グラフ

古田と新田の比較大正3年-9年（1914-1920）7カ年郡内平均
—反歩当自作所得

	収入		支出						差引所得		
	收穫高	収入金	公課	配水料	種苗料	肥料	備人給食料	農具其他		計	
古田	合	2.326	57.65	3.16	0.55	0.57	13.93	9.61	1.95	29.77	27.88
新田		2.269	56.34	1.47	0.69	0.58	15.29	9.64	1.92	29.59	26.76
新田 二毛作		3.096	55.63	1.54	0.69	1.59	24.59	16.36	2.70	47.47	28.16

（愛知県三大用水地価修正沿革史 P.142）

られている。

その結果、開拓地と古田を比較すると、大正初年ごろにはつぎの表にあらわれるように開拓地の方が肥料を多く要するが、地租が安く、收穫量はやゝ少いが二毛作が簡単にできるために、所得はほとんど同じになるまでに向上した。

この開拓地の地租負擔の軽かつたことは、大きな強みで、土地の改良と以後の農業発展のための、有利な原因のひとつとなつていつた。

(二) 農村社會のうつりかわり

小作料・肥料の重い負擔のため、村の行詰りはしだいに深刻となつて来た。ことに第一次世界大戦以後は、農産物の価格が下落して、この地方の農業経営に大きな打撃を与えた。

統計によつても明らかのように、大正十年（一九二一年）は非常な豊作が期待されていたのに、九月

年 度	作付反別	收 獲 高	価 格
大正 9 (1920)	反 15.659	千石 329.	千円 14.239
10 (1921)	15.759	180.	5.214
11 (1922)	15.685	365.	9.817
13 (1924)	15.714	344.	11.033
15 (1926)	15.631	290.	9.622
昭和 3 (1928)	15.578	310.	8.322
5 (1930)	14.829	371.	6.441
7 (1932)	14.977	321.	7.284

(青木氏著)

に入つてこの地方に、突然はげしい雹ひょうが降つた。そのため收穫は例年の半分、価格は前年の約三分の一というひどい凶作となつた。その上続いて翌十一年（一九二二年）は全国的にまれな豊作の年であつた。

祭のはじまるころ、農民は昨年になして悲嘆の涙にくれた。

豊作饞飢一七月には東京米相場が石当り四〇・六四円であつたが、收穫販売期の一二月には、二七・

三三円にまで暴落してしまつた。農家収入は、その年の三十六万石余の米価格を大正九年（一九二〇年）度の価格と比較すれば想像できよう。

このように一般的農村不況に加えて、凶作と豊作饑飢の二つの苦難を経験して、この地方の人々はわが国の農村の歩んできた米単一作（米ばかりをつくる）の弊害をしみじくと反省し、今後新しい農業経営に対する自覚を深めたのである。

ではいままでの農業の弊害はどこにあるか、将来の農業はどうしたらよいであろうか。

まず米作中心の農業の弊害をまとめてみると、

（1）小規模な農業では、家族の労働を利用するわけであるが、それは老若男女といろいろであるから、単一作だけではこれをうまく利用できない。

（2）農作物は季節のものであるから、単一作は、農繁期・農閑期の差がありすぎ、農閑期はすることもない失業の状態で、一年を通じて労力を十分利用できない。

（3）凶作、価格の暴落のように、一度水害・旱ばつなどの自然的打撃にあうと、農家の経済は致命的となる。経営規模は、他の地方と比較すればすこし広いが、耕地面積をこれ以上ふやすことはできず、小農の経営では人をやとうこともできない。いきおい少人数の家族の力で小面積の耕地から最大

の効果を生みだすための合理的な農業経営をしなければならぬ。碧海郡農会は、大正十二年（一九二三年）、十三年（一九二四年）の二カ年に、郡内六十戸の農家をモデルとして、農家経営講習会を開いてつぎの結論を得た。

（1）小面積で多くの収益をあげるには、園芸の作物を主とし、これに小動物（豚・鶏）を適当に配合すればよい。

（2）少人数で、多くの収益をあげるには、稲作をなるべく多くし、養鶏または養蚕を適当に加え、これに大動物（牛・馬）を加え、さらに園芸作物または農閑期に適当な副業を配合しなければならぬ。これが、いわゆる「多角形農業」と呼ばれた新しい農業経営で、これより計画は着々と効を奏して実現していった。

しかしそれが実現するためにはいろいろな条件が揃わなければならない。この地方において新しい農業経営がとくに大きな成功をおさめたのはなぜだろうか。以下その原因を考えて見よう。

（二）明治用水と開拓精神

それにはまず、この土地の人々の、伝統と環境によつて養われた独特の開拓精神をあげることが出来る。

その第一は**勤勞精神**である。用水開発以前の遠くはるかな昔から、人々は不毛の荒地と水の不足という自然の悪い条件とた、かつて、言葉にあらわすことのできない苦勞をなめて、不屈の勤勞精神を養つてきた。そして用水開発後開こんと地味改良のために長い忍苦が続いた。二代目・三代目になつて実を結んだと人々は回顧する。この勤勞精神によつて、人々はさらにあらゆる余暇と余力を善用し、一年を通じて農閑期のないように、新しい農業経営を推進させたのである。

その二は**自然の利用**である。困難な自然の環境の中で、人々は自然をどのように開發して人間の生活にふさわしいように、人間の福祉増進に役立たせるかという経験と態度を養つてきた。それが古くは彌厚翁以来、いくたの先人の努力となつてあらわれ、実現して明治用水となつた。このことは、人々にさらに大きな勇氣と激励を与えた。人々は朝に夕に、その恩恵に感謝しながら、その教訓に学んだ。土地の高低に応じて巧妙な水路網を作つて灌漑し、地味を改良し、地質にあつた作物を選び、水路の落差を利用して發電を行つた。新しい農業経営は自然を高度に利用した賜である。

その三は**進歩主義・合理主義**である。一般農村は伝統的保守的な傾向が多い、開拓者の人々には、いたずらに慣習にとらわれない、合理的・進歩的なすすんでやる一面があつた。科学の成果をとり入れる点では常に他に一步を先んじて、学界で発表されていいと思われることは、すべて実際に試みる

という態度があつた。試験場や学校の指導を積極的に受け入れ、新しい農作物を試作し、品種を改良し、農具を改善し、機械力の利用もいち早く普及した。それは今もこの地域の人々の誇である。

その四は**協同主義**である。この土地では用水なくして農業がなりたたない。用水は動脈のように人々の生活を統一支配する。こゝに人々は共存共栄の道を学んだのである。新しい農業経営である産業組合活動がこの地方にことに発達したのは偶然ではない。人々は個人の対立をすて、村々に組合を作り、さらに村々の地域的対立をすて、組合の連合会を作つた。網の目のように広がっているが、もとは一本の明治用水によつて生きるこの地方の人々には、より大きく協同しなければならぬという態度があつた。以上見たように、この地方の人々の思想や態度に、用水の及ぼした感化の力が感ぜられる。用水はこの地域に住む人々の精神を陶冶したということができると思う。そして、それが以後の農業の発展にも、有力な精神的基盤となつたのである。

(三) 明治用水と作業の合理化

一般に稲作は耕土・植付・收穫・手入と、細かいそして激しい労力があるのであり、機械化が困難である。そのため農繁・農閑の差が極端で、農繁期には猫の手もかりたいといわれるぐらい忙しい。わが国農業の欠点の一はこゝにある。この点この地方では、用水を利用するために作業が比較的容易で、

昭和 22 年度 碧海郡耕地利用率
(1947 年度)

(作付延面積 ÷ 経営面積)

	田	畑	合計
愛知県 平均	144	176	156
碧海郡 平均	152	195	162

(愛知県統計書)

無駄な労力を節約することができた。これこそ多方面の合理的経営ができるようにさせた主な原因の一である。

まずこの地方一帯がほとんど平坦地であるために、利点の大きいことは三河北設楽郡の山間部農村と較べればよくわかることである。

毎年、田に苗が成長するころ、水源の樋門は開かれて一万町歩に近い田に一斉の水がやつて来る。

人は必要な時に、必要量の水を簡単に得られる。水車・つるべ等の灌漑のための労力はまったく省かれ早ばつにたいしてはもつとも安全である。また沖積平地によくある冠水の被害もほとんど無い。このことは水田ばかりでなく、畑作についても可能で、果樹園に灌水するなどがその例である。

また排水の便がある。稲穂が色づくころ水門が閉されると、台地であるため、田面はすべて乾上つて畑と変らなくなる。春の耕土・秋の收穫には泥に膝を没する苦労はなく、田の中に機械を据えて脱穀し車を入れて運搬できる。このような田は裏作にもつともよく、麦・菜種・れんげ等が栽培され、冬季遊んでいる田はほとんどない。碧海郡の耕地利用率が

高いのはこのおかげである。

また灌排水の便利のために、田を畑に変え、畑を田に変えることが簡単にできると。明治後期綿作が行きつまると、多量の面積の綿畑は、ことごとく水田となった。養蚕が有利になると水田が桑畑になった。水田が果樹園、西瓜畑となったのも多い。

また開拓地であるため、一枚当の耕地に通ずる道巾も広く、人車・畜車を入れるに便利で、耕作・運搬の能率をあげている。ことに新しくできた開拓村の特色は、耕地が住居の周囲に集中していることで、農耕を行うのにもつとも理想的な状態である。

このようなよい点をさらに推進するのは、耕地整理事業である。これは明治三十三年（一九〇〇年）に郡内六ツ美村で県下最初に行われ、以来各地に組合ができて、農民の共同事業としてしだいに盛んになった。事業の内容については、耕地の交換分合を行つて区画を整理し、水路をよくし、道路を改修して車の便をよくし、水のとぐかない高地には蒸氣力、後に電力の揚水機をおいて開こんをすゝめ水の多過ぎる低い地には水路をつくつて悪水で排除した。開拓がおくれ、土地の高低の大きい高岡村などのように、大正七年（一九一八年）開こん助成法が定められてから、補助金を得て、開こんの進んだ所もある。

たゞし、配水中心部では開拓地で当初その必要が少かつたためか、耕地整理が進まず、現在耕地が区々で水路もまがりくねつていて相当の不利を感じていることは、用水にとつて将来に残された問題である。

2. 農業の教育と研究はどのような影響を及ぼしたか

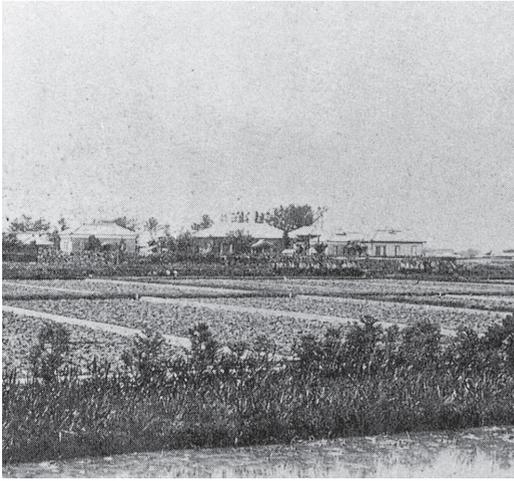
明治維新後、新しい日本の発展にかゝわらず、立遅れによつて行きつまつた農業を近代化し、新しい農村を興すためには、教育と研究と指導の力にまたなければならなかつた。用水開発後この地方が有望な発展性をしめしたため、愛知県下における農業研究と農業研究中心機関が、いち早く安城に設置され、地域社会に感化と指導の力を及ぼしたのは、用水の開さくと共に何といつてもこの地域にとつて大きな幸福であつた。それとともにその指導の任に當つた人々の中には、日本農業の歴史に記念すべき偉大な人物があらわれ、碧海農業の恩人として民衆から敬慕されていることを忘れてはならない。

(一) 愛知縣立農事試験場と岩槻信治氏

安城には明治二十九年（一八九六年）に農商務省の農事試験場東海支部が設置されたが、三十六年（一九〇三年）にこれが廃止されたので、その後当時清洲にあつた愛知県農事試験場の種芸部が移されて分場となり、米作地帯中心部の特色を生かして米・麦の品種改良を研究の中心として、以来愛知県

農業研究の中樞機関として大きな役割を果している。

事業の内容は大正二年（一九一三年）養蚕部を県立養蚕試験場に、大正十五年（一九二六年）畜産部を県立種畜場に移したが、その外は品種の改良・土壌肥料の分析・病虫害・各種器具の改良・果樹・農畜産加工・山村開発・不良土改良・促生栽培等、あらゆる農事に関する研究を擔当している。



愛知県立農事試験場

究を授け、地方農村に優秀な中堅指導者を送り出している。その事業は全県的なものであるが、地許の農会・組合・学校とも密接な関係を保ち、郡内農民は、その試験研究の結果を直ちに地許の耕地に適用することができると、この地方の農業の科学的進歩に大きな影響を与えた。試験場の存在と共に忘れてはならない人に、岩槻信治技師がある。氏は山崎校長の高弟として明治三十九年（一九〇六年）安城農林学校を卒業し、直ちにこの試験場へ奉職して以来、四十余年の一生を米・麦の品種の改良に

捧げ、一身の榮達を求めず、地味な、しかも農民の生活にもつとも大切なこの農事の研究を黙々と続けた。その努力は報いられて、全国農家が切望して止まなかつた多收品種「千本旭」、愛知旭、等の旭系をはじめ、外国種との交配でイモチ病に最も強いといわれる「双葉」、酒造米麦では「横綱」、白梅、など、ビール麦に至るまで、五十余种の優良品種が作り出され、現在県下はもとより全国的に奨励品種として拡まつている。また研究のかたわら技術員の養成や農民の直接指導にも熱心に当り、農業の恩人として敬愛された。最近氏の功績を記念して、各方面の農業関係の人々の手で、立派な農業博物館が試験場内に建設されたことはまことに心ゆかしい限りである。

(2) 安城農林學校と山崎延吉氏

明治三十四年（一九〇一年）、安城に愛知県安城農林學校が開設された。もとより愛知県最初の農林學校であるばかりでなく、全国でも最もすぐれた伝統を持つ農學校の一として、わが国の農業教育に大きな影響を与えた。この地方の農業を発達させた力は、最初は明治用水であり、そのつぎが安城農林學校である。とまでいわれた。それは本校に独特の教育方針と活動があり、學校教育がたゞ校内だけに留まらず、広く地域社会を教育する原動力となつたからである。そして初代校長としてこの學校の創立以来二十年にわたつてもり立てると共に、この地方の農業を導き、やがては日本農業の指導者と

して大きな功績を残した山崎延吉先生の存在が、永久に記念されるであろう。

先生は明治三十四年（一九〇一年）本校創立と共に校長として赴任し、以後大正九年（一九二〇年）に至るまで二十年間、引続き在職し、その間固い信念と熱烈な人格とを以て、数多の生徒に大きな感

化を及ぼした。



先生は、「教育」とは教えるばかり
でなく、生活の才能を育てるに在

るとして、自学自治の精神を教育

方針の第一に掲げ、勤労精神を養

つて個人主義の弊害を戒め、共同

一致が成功の基であることを本校

教育の基準とされた。このため本

校には独特の剛健な自治精神がみ

なぎり、教育内容も主知主義の弊を改めて、学科とともに勤労実習を重んじ、地域と時代の要求に応じて米麦・畜産、とくに養雞・多角的合理的農業経営・治水治山事業等の研究実習に特色を發揮した。

本校を巢立つた生徒は、やがて碧海郡はもとより愛知県の農業指導の中心となつて活躍した。

また先生の信念は、教育活動は単に校内にとゞまらず、広く社会全般を対象にしなければならないとして、学校を地域社会に開放した。これは当時にあつてはまつたく革新的な教育方針であつた。このため先生の教育活動は多方面にわたつたことは驚くばかりで、自ら農村を巡回して講演や実地指導を行い、学校職員もできる限り校外教育に関係させ、校内にしばしば農村青年の会合を開き、また簡単な養蚕実習科制度を設けて一般農民を入学させ、義務教育を卒えた青年のため、青年團の組織・実業補習教育の重要性を強調して、小学校の先生に長期の農業講習会を開き、その結果安城に県立補習学校ができ、大正七年（一九一八年）には全国最初の実業教員養成所（後の青年師範学校・現在の学芸大学安城分校）も設立された。また農会・県農務課とも緊密に提携して、先生が学校にはじめた篤農家懇談会は有名な当地方の行事となり、すぐれた学者・農政家が本校を訪れ、この地方に新しい刺激と感化を与えた。このように行届いた職業教育・社会教育は全国農業教育の模範となり、碧海農業のともし火となつたのである。

先生が碧海郡農業の慈父として仰がれているのは当然である。先生はさらに大正九年（一九〇〇年）校長の職を退いてからは、帝国農会幹事となり、後、辞して全国の農村を行脚して農村更生を説き、

新聞雑誌にその主張を発表し、昭和三年（一九二八年）には碧海郡を中心とする農民から推されて代議士となり、その活躍ぶりは全国的なものとなつていつた。こうして明治用水かんがい地域は自然とよき人を得て他の地方よりとくべつにすすんだ発展をしていつた。

3. 日本デンマークといわれる新らしい農業経営はいかにしてうまれたか

(一) 協同経営

碧海郡を中心とし農業が全体としてめざましい成果を収めた原因は、明治用水によつて培われた協同の精神、新しい創造に努力する精神によつていち早くこの「組合主義」の経営をとり入れ、それによつて「多角形経営」を具体的に推し進め、多方面に活潑な組合事業を行つたためである。

農民の組織した団体は、戦時中農業会に統制されるまで、だいたい「農会」と「産業組合」の二系統に分れて発達した。農会は主として指導機関であり、産業組合は主として事業活動の機関である。最初は農会およびその系統下の生産指導の諸組合がつけられ、やがて農村不況の打開策として購売販売事業に着手して、これを産業組合に移し育成していつたのである。一般に他所ではやゝもすると利害相反して対立したこの二つが、この方ではよく提携して農家の福利増進に努力したことも、成功の原因であつた。これは当時碧海郡だけでなく、愛知県の農業指導者の大部分が安城農林学校卒業生であ

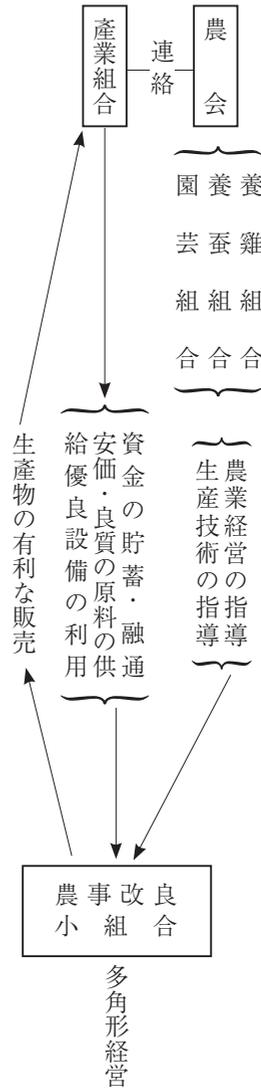
昭和6年 (1931年) 碧海郡農産物年産額

種類	価格	%
米 麦	5.084 千円	52.1
食用農産物	193	2.0
園芸農産物	1.312	13.5
養 雞	2.319	23.7
養 蚕	842	8.6
桑 苗	14	0.1
合 計	9.764	100

その外にもなお生産物はかなり多方面にわたっている。すなわち碧海郡農業は、だいたい米作を中心として、養蚕・養雞・蔬菜・果樹を配する五角形農業といわれるわけである。しかしその組合せは、後に見るように郡内各地にそれぞれの特産物があつてかならずしも一様ではない。

(二) 多角形經營

昭和六年（一九三一年）の郡内農業生産額を種類別に見ると、主要なものは、やはり米麦であるが、



るためでもあつた。いま両者の関係を図で示すとつぎの通りである。



安 城 町 農 会



碧海郡購買販売連合会附属更生病院

麦作付面積及び収穫高

年次	作付反別	収穫高	価格
大正 9 (1920)	4.858 町	73.695 石	1.306 千円
11 (1922)	4.391	56.136	1.707
13 (1924)	3.586	47.704	855
15 (1926)	3.842	59.463	743
昭和 3 (1928)	3.415	51.588	764
5 (1930)	3.365	51.718	601
7 (1932)	3.778	57.970	525

米 麦

米作は前に見たように大正十年（一九二一年）ごろを最高として、以後徐々ではあるが作付面積が減少している。麦作は畑作及び水田の裏作としてもつとも多く栽培されたが、これも表によつて明らかのようにしだいに減少の傾向をたどつていく。そこにも多角形経営への転換があらわれていくわけである。

しかし県下の米作における碧海郡の位置は断然他を圧して第一位で、依然として穀倉地帯の名に背かず、農家収入の大部分をなしている。

園藝果樹

表の果菜類総額の中には、西瓜の外、かぼちや・なす・きゅうり・いちご・しろうり等を含み、果実類にはなしの外に、みかん・もも・かき・ぶどう等を含んでいる。米麦の減少するに反して、西瓜、梨等の作付面積・収穫高等増加の傾向があらわれ、とくに大正十四年（一九二五年）ごろからの増加が著しい。

いままで郡内の園芸は見るべきものがなく、とくに蔬菜類などは大正初年ごろまで農家はほとんど販

果菜類累年生産額

		大正 12 (1923)	14 (1925)	昭和 2 (1927)	4 (1929)	6 (1931)
総 額		千円	?	897 ^{千貫}	1.096	564
西 瓜	作付面積	115 町	352	303	427	591
	数 量	683 ^{千貫}	2.711	2.852	4.643	3.492
	価 格	160 ^{千貫}	494	687	842	432
ト マ ト	作付面積	0.3 町	5	6	26	43
	数 量	1.4 ^{千貫}	31	46	261	372
	価 格	0.2 ^{千貫}	3	6	32	25

果菜類累年生産額

		大正 12 (1923)	14 (1925)	昭和 2 (1927)	4 (1929)	6 (1931)
総 額		308 ^{千貫}	245	329	280	299
日 本 梨	収穫高	310 ^{千貫}	518	911	887	1157
	価 格	111 ^{千貫}	137	170	182	227

売を知らぬ有様であつた。たゞ試験場の指導で、南部地方に柑橘類の栽培が普及していたが、大正十二年（一九三三年）一月一日大雪があつて大打撃を蒙つた。

このころから柑橘に代つて、なし・ももの栽培が行われるようになりまた郡の中部以北には西瓜の栽培が盛んになつた。

果樹・蔬菜の発達は、交通の

便がよく近くに都市消費地が新に興つたことにもよるが、栽培者が小組合を組織して、苗の購入・栽

培・防虫・販売等の事業を共同で行つたためでもある。

ことに西瓜は、碧海郡の乾田に適していることが実証され、郡農会は栽培販売方法を改善し、特産地の大和を視察して品種を改良し、水田を転換して作付面積が増加し、大都市に共同出荷して三河西瓜の名を高めた。もつとも盛んなのは安城町で郡内生産の七割を占めた。

〳なしは台地で、用水によつて自由に灌漑できるこの地方に適し安城町を中心にして各地に栽培され、二十世紀種も普及して安城梨として有名になつた。専門園芸として農園を営み、成功した人も少くない。もも・ぶどうは南部の明治村に多い。またれんげを家畜飼料、窒素肥料として、水田裏作に栽培することが普及し、上海から中国種をとり入れて品種を改良し、種子は農会・組合連合会で共同販売して県下一の生産を上げた。この外知立では藺草が栽培され、ござ・畳表・花筵の製造が行われ高岡村などの台地では茶園が多く、組合事業で製茶が行われた。

(二) 畜産

耕地面積が比較的広い当地方では耕作に畜力を利用して労力を節約する必要がある、また厩肥を利用して金肥代金を節約することが農家経済の上からも必要である。こゝに経営合理化のため畜農業の重要性が認められるようになった。農林学校や試験場、農会等は早くからその重要性を強調し大正十

畜類頭数 累年表

年次	牛	豚	馬
大正 2 (1913)	1.730	227	420
4 (1915)	1.825	428	418
6 (1917)	1.280	579	367
8 (1919)	1.315	1.385	330
10 (1921)	1.433	1.160	286
12 (1923)	1.858	1.915	316
14 (1925)	1.961	2.143	360
昭和 2 (1927)	2.016	2.332	309
4 (1929)	2.349	3.212	327
6 (1931)	2.491	4.460	313

牛馬耕面積累年表

年次	耕田面積	牛馬 耕面積	%
大正 12 (1923)	16.039 町	2.791	17
14 (1925)	16.030	3.900	24
昭和 2 (1927)	16.027	4.170	26
4 (1929)	16.025	4.391	27
6 (1931)	15.964	6.236	39

二年（一九三三年）には岡崎に県立種畜場が設置され、経営方法・品種改良・畜力利用の農具・技術の改善を指導し普及に努力した。表によつてみると、馬は減少の傾向にあるが、牛は大正十年（一九二二年）、豚は八年（一九一九年）から増加が著しくなり、有畜農業の実現に向つている。畜耕も年々普及してきたことが認められる。

この外、養蜂も、れんげ・菜種・果樹等の花を利用して安城附近を中心に行われる。

養 雞 累 年 統 計

年次	雞 羽 数		雞 卵		飼 育 戸 数	
	成禽数	雞 数	産卵個数	価 格	総 数	内 100 羽以上
大正 1 (1912)	75千羽	24千羽	6.559千羽	131千羽	6.825戸	42戸
4 (1915)	131	79	14.455	272	9.546	191
8 (1919)	142	54	13.264	784	7.449	183
10 (1921)	245	124	20.798	988	10.098	303
11 (1922)	329	120	34.997	1676	10.249	424
12 (1923)	322	98	35.374	1492	10.249	426
昭和 2 (1927)	536	398	58.495	2455	10.901	1.966
6 (1931)	908	246	95.577	2219	7.841	1.502

養 雞

碧海郡は日本一の養雞地といわれた。

しかし、その發達は統計によつても明らかにならうに大正十年（一九二一年）の米の大凶作以後である。そして以後年々目ざましい發展をとげ農産物統計にあらわれるように農家收入の重要部門を占めるに至つた。この發達は、前述の通り農会の指導と、産業組合の巧妙な經營の賜であつた。

の初生雛の孵化数は百五十万羽を越え、年五十万羽乃至七十万羽は県外に移出販売された。

養雞事業の勃興によつて大量の雛の需要が起り、こゝに個人または組合經營で、専門的な人工孵化事業も發達した。昭和七年（一九三二年）ごろ事業場二十五カ所、孵卵機九百台、一カ年

養蚕に関する碧海郡累年統計

年次	桑園反別	收繭量	価 格	飼育戸数
大正 2 (1913)	1.400 町	31 千石	1.420 千円	7.458 戸
4 (1915)	1.491	29	1.017	7.492
6 (1917)	1.863	36	2.517	8.186
8 (1919)	1.971	36	3.681	7.872
10 (1921)	1.491	46	2.276	7.357
12 (1923)	1.829	231	2.362	6.991
14 (1925)	1.875	305	3.015	6.640
昭和 2 (1927)	1.925	317	1.916	7.361
4 (1929)	2.635	447	3.076	7.827
6 (1931)	2.163	321	842	6.763

(大正 12 年迄の飼育戸数・養蚕のみ)

わが国独特の初生雛雌雄鑑別法も当地方に発達し、多くの熟練技術者を出した。また養鶏業者のうちには専門的研究をする者も多く、多産鶏種の作り出しに努力した。粗食・多湿に耐える三河種はこうして生れたのである。

專業養鶏としては高浜町吉浜がとくに有名で、部落戸数約二百戸のうち養鶏を行う者百八十八戸、そのうちで千羽以上を飼育する者が二十余戸、年産額三十余万円と言われた。

養 蚕

養蚕は明治初年以來、輸出の増加に伴つて発達をとげて来た。明治二十二年（一八八九年）の大つなみ・二十四年の（一八九一年）の地震によつて、桑園が荒廢して打撃を受けたこともあつたが、海外の需要によつて糸価が上り、農林学校・農事講習所の設置によつて、蚕種改良・蚕病予防等もすゝみ農家に

とつて、米以外では最も重要な商品産物となつていた統計によると、大正十一年（一九二二年）・十二年（一九二三年）ごろから増加の傾向があらわれ、とくに夏・秋蚕を飼う家が多くなつて、生産が上つた。昭和五年度（一九三〇年）には、養蚕戸数は農家総戸数の四〇パーセント桑畑面積は耕地面積の一二パーセントを占めている。たゞし、養蚕県として全国的に有名な愛知県下における碧海郡の位置は中位で、副業養蚕として、一戸の出繭もあまり多くなかつた。

養蚕の発達に伴つて製糸業が発達し、昭和五年度（一九一六年）で、工場数三四九、工員数約七千人を数えた。また刈谷を中心に蚕種の製造が行われ、桑苗生産も多かつた。

たゞ当時わが国輸出の一位を占める生糸は、海外の市価に左右され、昭和六年（一九三〇年）以後はアメリカの不況の影響を受けてしだいに衰えている。

以上五種類に分けて碧海郡農業の多角経営をのべたが、なおこの外米作によつてできるおおくのわらを利用して、縄・むしろ・かます等の加工が一般に行われ、わら箒を特産する村もあり、また牛乳・かん詰・調味料等、農産物・畜産物加工の食品工業も行われ、さらに種々の小規模な副業があつた。

日本デンマーク

安城野の一角、沃野に注ぐ水路のほとりに立つて過去を振り返ると、しみぐと人間のなしとげた業績

の偉大さが偲ばれる。彌厚翁以来一世紀半の歴史がそこにある。自然一水と土地を利用していかに人間の福祉増進に役立たせるかという問題に向つて、数知れぬ人々の努力が捧げられた。荒地に水が注ぎ、稲が実り新しい村が建設された。さらに用水の恩恵、能率的な条件と不屈の開拓協同の精神を基礎にして近代的な教育と指導により、人々の協同の力で、新な繁栄が築かれ、人間の福祉はより一步と前進した。

この地には開拓の恩人を祀る明治川神社をはじめ、用水組合・農会・産業組合連合会・農業図書館・農林学校・組合病院等の農業関係の施設が立並び、さらにどの村を訪れても田舎には珍らしい立派な施設で農会や産業組合が活潑に運営され、村独特の農産物があり、先覚者を讃えた記念碑・銅像が路傍に過去の努力を物語っている。このことを伝え聞いて多くの人々が全国各地から訪れ、碧海郡の名は全国的なものとなり、日本デンマークという名称がいつとはなく高まつていつた。その昔、デンマークの国は、数度の戦争に国土が荒廃し世相が行詰つた中から、新しい教育と研究をおこし、その力によつて、産業組合経営と主畜農業経営を発達させて、理想的農業王国を建設し、世界農業の模範となつた。まことに日本デンマークの名はこの土地にふさわしい。われ／＼はデンマークの歴史の歩みと幾多共通するものを、明治用水の注ぐこの農村の一世紀半にわたる歴史の発展の中に見

出すことができるわけである。

四、明治用水は今後どのような問題があるか

1. 戦時中から戦後、配水地域の農業はどのような影響をうけたか

このように地域社会に非常な恩恵を与え、西三河一帯を近代的農業王国にした明治用水の灌漑地域は太平洋戦争をめぐつてどのような影響をうけたのであろうか。まず第一には農業に従事する人口の五〇%余を占める青壯年層の男子を戦場に工場に、女子青年層の多くを勤労報国の名のもとに、軍需工場へ送り、農業は村に残っている老人婦女子の仕事となり、人手がすくなくなつてしまった。そのため、作付のできない水田さえでき、昭和二十年の統計では、碧海郡だけでも約三町に及んでいるのは、このことを物語っている。

農業労働力不足による植村不能水田（昭和二十年）

依佐美村〇・一〇町歩 桜井村〇・八五町歩 矢作町〇・三六町歩 刈谷町一・二〇町歩

計（碧海郡全体）二・五二町歩

つぎに戦時国策の線に沿つて国民の食糧の確保、国民経済の安定をはかるため、水田には稻・麦畑地